

「研究施設雑感」

鈴木 傑

平成16年3月31日を以って定年退職することになりました。昭和48年の窯業技術研究施設（現セラミックス基盤工学研究センター）発足時から関わりを持ち30年を経て国立大学最後の卒業者になりました。30年間という途方もなく永い年月をよくもったものだといながら自分自身に呆れ、感心もしているところです。定年までの残りの年が一桁になると時間の経過が速いと感じるのが普通のようなのですが、最後の10年間は、長として周りの同僚の方々に数多く迷惑をかけながら仕事をしてきましたので、私にとっては永い永い年月に感じられました。組織を運営する役への不適格さをしみじみと感じたものでした。研究棟が本部（鶴舞キャンパス）を離れて多治見市に建つと決まった頃（昭和50年？）に小林教授（現名誉教授）について現地を見に訪れましたが、さすがに軽いカルチャーショックを受けました。周辺は空き地のやまで鳥獣保護区域の看板が立っていました。当時の学長はカミナリ研究の専門家で雷に向かってロケットを打ち上げるのに好

適地だとの話も出たほどでした。そのうち、民家、美濃焼卸団地の建物が建ち始め、実現はしませんでした。自然環境の真っ只中に建立予定地はありました。その頃の印象が強く残り、盛んに表れるのはやはり年の性かも知れません。30年の間に、この研究施設・センターは何度か存続の危機に瀕してきました。昭和60年の大学院博士課程の設置に伴う全学的改組で分散・消滅の危機。平成3年のセラミックス研究施設への名称変更。時限10年が付きました。平成13年に期限切れに伴うセラミックス基盤工学研究センターへの改組。大きく分けても3つの重大な改組を経験しました。しかし、法人化により、劇的な変化を遂げようとしている現在は過去の変化を外挿した点からは大きく外れるものと予想されます。良いときにやめるねという言葉を受けながら、次の時代を担う教職員の皆さんの更なる発展を祈念してこのページを閉じることにします。有難うございました。

